



創立20周年記念祝賀会・目黒教会

総合的な難民受け入れ体制の構築を！

日本が初めて積極的に受け入れる「第三国定住」難民の第1陣、ミャンマー難民3家族18人が9月28日来日した。「第三国定住」難民とは、母国（第1国）へ帰国できず逃れた国（第2国）での定住も困難な難民を、先進国が中心となって最終的な定住先（第3国）として受け入れる制度だ。米国やカナダ、オーストラリアなど約20カ国が受け入れている。

日本は80年代、特例的にインドシナ難民を受け入れた以外、ほとんど難民を受け入れてこず、「難民鎖国」と内外から批判されてきた。政府は、先進国としての「責任分担」を求める国際社会の要請に方針を転換。今年度から3年間で計90人のミャンマー難民をパイロットケースとして受け入れる。

一方、国内での難民申請者も増加している。申請者は、原則就労を許可されず、支援も限定的なため、生活に困窮している人が多い。総合的な難民受け入れ体制がないのが現状だ。

日本のカトリック教会は、1970～90年代、全国に20数箇所の定住支援センターを設けインドシナ難民の受け入れに積極的に貢献した。その経験を活かし、新たな難民の受け入れに積極的に関るよう期待されている。

CTIC副所長 有川憲治

カトリック東京教区が運営している外国人（移住者・難民・移動者）のための司牧・相談センターです。日本での生活に関する様々な相談を受け付けています。

相談日時：

月曜日～金曜日 10:00～17:00

相談言語：

日本語、英語、タガログ語
ポルトガル語、スペイン語
イタリア語

- 総合的な難民受け入れ体制の構築を！
有川憲治 1
- 創立20周年に寄せて
幸田和生司教 2
- 活動に参加してみても
川口あすか 4
- CTIC 20年の歩み
大原 猛 5
- CTIC の活動 7
- お知らせ 8
 - ・ 創立20周年記念式典御礼
 - ・ 人事
 - ・ クリスマス献金のお願い

先日、ある女子修道会の本部修道院に行きました。敷地が広くいろいろな建物がありません。しかし、シスターは高齢化していて、人数は減っています。そこで聞いた話が印象的でした。

1975年にサイゴンが陥落し、ベトナム戦争が終わりました。そのとき、多くのベトナム人がボートピープルとしてベトナムを脱出し、日本の船に助けられた人たちが日本に来ました。しかし最初のころ、日本政府は難民の受け入れをまったく認めていませんでした。彼らはアメリカにわたってそこで生活を始めることになっていましたが、アメリカに行くまでの数ヶ月、日本政府から頼まれて、この修道院がベトナム人の家族を一時的に受け入れることになりました。たまたま空いていた修道院の中の家にその家族は住むことになりました。

シスターたちは親切ですから、その家族の住んでいる家にテレビを持っていきました。しかし、2、3日して、彼らはそれを返しに来ました。

「わたしたちは旅人です。そのわたしたちにとって一番大切なのはお互いの団結です。そのために必要なことは互いによく話し合うことなのです。ですからテレビはいりません」

それからしばらくしてその修道院に付属した幼稚園の父母たちが、ベトナムから来た家族のために、子どもや大人の衣類を集めて持ってきました。ところがその家族はそれも辞退しました。

「わたしたちは旅人ですから、最低限の必要なものしか持たないほうがよいのです」

その後、この家族はアメリカに渡り、何年かして生活が落ち着いてから、日本を訪問し、そのときにお世話になった修道院にも来たそうです。彼らは、ほんとうに感謝していました。それは今日の福音にあるように「わたしが旅人だったときに宿を貸してくれた」ということに対する大きな感謝でした。

日本では、1980年代の終わりごろ外国から来た人々が急に増えてきました。そして、フィリピンやブラジル、ペルーの人はカトリック信者が多かったので、教会に来る外国人の数が増えました。日本の教会はそれまで、言葉の違い、信仰生活の習慣や表現方法の違い、仕事や生活上の問題などを抱えた外国人を受け入れた経験がありませんでした。多くの司祭や信徒が当惑しました。

東京大司教区は1990年にカトリック東京国際センターCTICを始めました。1994年には「CTICかめいど」を開設して、日本にいる外国人の生活・仕事・ビザなどの具体的な問題を解決するために働くようになりました。CTIC開設20周年を迎え、わたしたちは今までの歩みを振り返っています。日本の教会は戸惑いながらも外国人を受け入れ、なんとか多国籍の人々と共に生きる教会を作ろうとしてきました。その結果、多くの教会で外国人と一緒にいて、一緒に祈るのがあたりまえになっています。



振り返ってみると、わたしたちは日本人の信者が彼らのためにこれだけのことをしてきた、ということ以上に、外国の人たちが日本の教会にもたらしてくれたものの大きさを感じます。外国から来たカトリック信者は、数の面でも、若さとヴァイタリティーの面でも日本のカトリック教会を活気付けてくれました。しかし、それ以上にもっと深いものを運んできたと思います。

現代の日本の社会の大きな問題は「孤立」ということです。隣の人が生きているか死んでいるかも分からないほど、この社会では、人と人のつながりが希薄になってしまっています。みんな自分の力で自分の生活を作り上げ、それを必死で守ろうとして働いています。「成功するのも自分の責任、失敗するのも自分の責任」「誰にも頼らずに自分の力で生きていかなければならない、それができないのは駄目な人間だ」。このような考えの中で人と人が支え合う生き方が見失われ、人々は大きなストレスを感じるようになりました。日本人カトリック信者もこの社会の中で生きていて、そこからやはり影響を受けていました。

先ほどお話ししたベトナム人の家族はそうではありませんでした。彼らは今、生きているというだけで本当にそれを神の恵みだと感じ、神に感謝する心を持っていました。そして、生きていくために第一に必要なものは、家族の支えあいであり、共同体の助け合いだということを彼らは感じていました。ある意味で今も、自分の国

を離れて外国で生活している外国籍の信徒の皆さんは、そのことをわたしたち日本人の信徒に教えてくれていると思います。

もう一つ、外国人信徒の急増という現実には、わたしたち日本の教会が「貧しい教会」であることに気づかせてくれました。外国から来た人の中にもお金持ちがいると思いますが、でもこのことも大切です。1998年にリーマンショックが起き、多くの外国人労働者が仕事や住む家を失いました。母国に帰らなければならない人もおおぜいいました。経済不況が長引けば、日本の社会の中で、外国人排斥の気運が高まるでしょう。ところで、日本のカトリック教会は、もはや日本人の教会ではありません。日本にある多国籍のカトリック信者によって成り立っている教会です。そう気づいたとき、日本にいる外国人の抱えている貧困の問題や他のさまざまな困難は、決して教会の外の誰かの問題ではなく、わたしたち自身の問題になりました。このことは本当に大切な気づきでした。実は日本人の信徒の中に貧しい人がいるのに、日本の、特に東京の教会はそれを忘れ、貧しさということを他人事のように感じてしまっていたのです。

もう一度、先ほどのベトナム人家族を思い出します。彼らはほんのわずかなものしか持たずに旅をしていました。それは安住の地を求めての旅、貧しく困難の多い旅でした。

「わたしたちは旅人です」この言葉は、本当はすべてのキリスト者の言葉ではな

いでしょうか。わたしたちは皆、ベツレヘムの聖家族のように貧しい旅人です。その中でなんとか励ましあいながら一緒に神の国の完成に向かって歩んでいこうとするのです。これがわたしたちの教会です。

マタイ福音書（25章31-40節）のイエスの言葉は、人が生きる上で何が一番大切かということをおわたしたちに教えています。

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ」

よくよく考えてみると、大きなことをしているわけではありません。食べ物を持っていたら半分、分けてあげる。宿に困っている人がいたら、自分の家に泊めてあげる。病気の人のそばにいてあげる。「何かをしてあげる」というよりも「その人の重荷を共に担い合う」ということだと思います。どの国の人も互いに重荷を担い合う、このことを本当に大切にしながら、CTICが、というよりも東京教区の教会が歩み続けることができますように、聖霊の導きと助けを祈りましょう。



CTIC活動に参加して

ボランティア 川口あすか

私は今年の三月から八月まで、ボランティアとしてCTICで働かせていただきました。CTICを選んだ理由は二つあります。一つは、CTICの活動が「人を相手にする活動だからです。ボランティアをするなら、ごみを拾ったり木を植えたりする「もの」相手の活動でなく、直接「人」と接する活動に携わりたいたいと考えていました。もう一つは、CTICが扱う難民問題が、私が大学で学んできたことと関連があるからです。私の専門は平和構築で、国際難民法の勉強もしたため、CTICの活動を通して難民問題の実情を知ることとは、個人的にとっても意義深く感じました。

CTICで働き始めて、その活動内容の多様さに驚きました。CTICの取り

組みは難民問題にとどまらず、日本に住む外国人の生活全般に及びます。例えば、ダブル国籍の子供たちのために毎年キャンプを催して、文化交流や情報共有の場を提供しています。またシスターや神父様方は、毎日あらゆる国の方の生活上、宗教上の相談にのっています。

私は主に、食料・生活用品・医療相談の無料サービスを受けに来た難民の方々の対応をしていました。そして、時々「難民勉強会」や入国管理センターに同行させてもらいました。一番印象的だった経験は、牛久の入国管理センターへ行って三名の収容者と面会したことです。全員「仮放免をもらうための保証人を見つけてほしい」というのが一番の要求でしたが、私ができることはただその場で話を聞くことと、石鹸や洗剤などの生活用品を差し入れることだけで、大きな無力感を感じました。けれども同時に、話し相手になることや生活用品の差し入れは、収容センターでの彼らの生活を支える上で非常に重要なことだとも思いました。この経験を通して私は、ボランティアの役割とその限界を学びました。

CTICで働きながら、とても身勝手に思われる相談をする人もよく見かけました。しかし、スタッフの方々は常に相手の事情を理解しようとする努力、できる限りの援助、あるいはその人にとつて最善と思われる策を共に考えていらつしやいました。その精神が二〇年間CTICを支えてきたのだと思います。私はこのような方々と共に働くことができ、貴重な経験をたくさんさせていただけたいことを、心から光栄に思います。

2009年末の外国人登録者数は、約220万人となり、この20年間で2倍に増加したことになる。カトリック教会にもフィリピン人、ブラジル人を中心とする外国籍信徒も急増し、今や日本のカトリック教会は、日本人信徒よりも外国人信徒の方が多いと推計されている。

特にこの20数年、日本のカトリック教会は（全国、各教区、各小教区）、模索しながらも、外国籍信徒に対する様々な取り組みを重ねてきた。

日本の司教団は、1989年、司教総会にて「外国人労働者への人権問題への関わり」が日本の教会の福音宣教の課題のひとつであるとした。1993年には『国籍を越えた神の国をめざして』を発表し、日本の教会へ「移動する人々を、キリストにおける兄弟姉妹として迎え入れ、様々な違いと共存できる共同体を作りあげていく努力」を求めた。

東京教区では、1990年教区100周年事業として、すべてのキリスト者が国境や民族を越えて集い、愛と喜びを分かち合う場として始まった、「インターナショナルデー」は、毎年3,000名以上が集い、日本人、外国人の交流の場としてすっかり定

着した。

また、外国人のための司牧相談支援センターとして設立された「カトリック東京国際センター」は、外国人共同体の信仰養成や、様々な司牧テキストの制作、年間3,000件を超える相談支援活動など、東京教区はもちろん、全国の教会、行政機関、外国人支援団体との連携を深め、協力の内に活動を進めている。

2002年に発表された『福音的使命を生きる』では、外国人の司牧と困難を抱えた外国人へのサポートを教区の優先課題として提唱された。

今後も、日本を訪れる外国人は、増加する傾向にある。また、高齢化する移住者、子どもたちへの対応は、急務の課題だ。引き続き、それぞれの現場で、現代の「時のしるし」である移住者への関わりが求められている。

■ 関口から亀戸相談支援センターへ

1990年、関口で設立されたCTICは、設立当初、「国際司牧センター」としてスタートしたが、ビザや労働、疾病問題など緊急相談がCTICや小教区に寄せられ、日常的に支援活動に比重が置かれるように





なった。そのため、1994年、こういった外国人のニーズに応えるために、外国人が多く居住する東京東部地区に事務所を移設した。CTICには生活のあらゆる領域にわたる相談が寄せられた。このことはCTICスタッフにとって貴重な経験となった。人間の痛みや悲しみに触れ、解放への歩みを共にしたことは、正に現代社会での福音の世界に接する経験となった。

一方、外国語のミサのニーズの増加、外国籍信徒司牧が個々の小教区や司祭、信徒に委ねられ、幼児洗礼、信徒登録など混乱が生じていた。また、文化や信仰表現の違いから日本人信徒とのトラブルが生じた。また、信仰養成のためのテキスト、教材の不足、司牧方針の欠如、司牧者の不足等で、移住者司牧を専門に扱う部門が望まれた。1997年5月18日に発布された東京教区司教教書「人間への共感をバネとして」の中で前教区長白柳誠一大司教は「東京国際センターが、大切な役割を果たしてきております。……課題は人道的な対応だけではありません。外国人の信徒のさまざまなニーズ（たとえば典礼や幼児洗礼等）に応じていくことも求められております」。

■ 目黒司牧センターの設立

こういった流れのなかで、2000年、目黒教会内に司牧センターが誕生した。センター長には、現イエズス会総長のニコラス師が就任し、フィリピンから信徒宣教者が招聘され、外国籍信徒司牧に関する諸問題に取り組むようになった。

■ 様々な取り組み

目黒での活動は多岐に亘った。外国人司牧担当する司祭の定期的な集会、そこでの「外国人司牧に関するポリシー」の検討。フィリピン人の諸団体との連携をはかり、協議会の構築。レイミッシヨナリー、司祭の各小教区への訪問、支援。幼児洗礼、結婚準備セミナーの開設、幼児洗礼、初聖体、堅信などの教材の作成。その他、警察・入管などに拘束されている人への訪問支援、難民への支援活動などなど。

■ CTICちばの設立

2001年、千葉の司祭、信徒からCTIC千葉の開設が要望があり、何度も会議を重ね千葉市に開設された。2000年の統計によれば、千葉県の信徒総数は1万1128人（登録者数）に対して、外国籍信徒総数は2万数千人と推計されている。実際に千葉県の全ての小教区で外国語ミサが行われている。そのため、CTIC設立以前からフィリピン人のレイミッシヨナリーが働いていた。

■ 3事務所の統合

CTIC設立された時代から約20年の月日が流れ、外国人の置かれている状況も大きく変化するようになった。超過滞在者の激減、外国人移住者の定住化など、司牧と生活相談支援などが協力して取り組む必要性が増大し、1年の時間をかけて亀戸、目黒、千葉の事務所、教区と相談を重ね統合することになった。

カトリック東京国際センター CTIC の活動

1. 外国人の信仰サポート

外国籍信徒の方々が、日本で豊かな信仰生活を送ることができるよう、各言語で情報を提供しています。また、地域の教会（小教区）と協力し、ミサ・洗礼などの各秘蹟サービスの提供、信仰教育や黙想会等の養成プログラムを企画しています。

外国人共同体作りのサポートやリーダー養成、また毎年、東京カテドラルで行われる「インターナショナルデー」などの国際イベントの企画運営等を通して、「多文化共生の教会」作りに協力します。

信仰教育支援

- ・セミナー、研修会の実施・指導
- ・多文化の背景を持つ子どもたちのプログラム
- ・青少年国際サマーキャンプ

小教区・外国人共同体との連携

- ・外国人共同体の養成
- ・カテキスタ養成セミナー
- ・外国語ミサ一覧の作成・配布
- ・タガログ語/ポルトガル語「ミサ典礼」

信仰教育教材開発

- ・秘蹟についての外国語版テキスト作成
- ・国際ファミリーのための祈りの本作成
- ・外国語の司牧通信発行（年10回）
 - Kalakbay（英語）
 - Juntos（スペイン語）
 - Brasileiros no Japão（ポルトガル語）
- ・インターネットによる信仰メッセージ
- ・携帯メールによる信仰メッセージ

2. 外国人の自立支援サポート

日本で困難を抱える外国人が自立した生活を送れるよう支援します。

生活相談・労働相談

入管手続、職場のトラブル、家庭や子どもの問題、日本の習慣・社会制度など、日本で生活し直面する様々な相談をお受けします。

*面談相談は、事前の予約が必要です。



難民支援

近年、日本政府への難民申請者が急増しています。難民申請者の生活支援や様々なサポートを行っています。

3. 収容されている外国人のためのサポート

東京入国管理局、東日本入国管理センターでの面会支援や、拘置所に拘留されている方々の訪問を行っています。

4. ネットワークへの参加・他団体との協力

諸団体と協力して、様々なイベント・企画、政策提言等を行っています。

- ・日本カトリック難民移住移動者委員会
- ・移住労働者と連帯する全国ネットワーク
- ・なんみんフォーラムジャパン FRJ
- ・高校進学ガイダンス実行委員会
- ・ネットワーク Kameido
- ・牛久面会訪問キリスト教ネットワーク

ほか

■ 創立 20 周年式典に ご参加ありがとうございました！



カトリック東京国際センター CTIC は 1990 年、東京教区 100 周年事業として国際化する教会、社会に奉仕するセンターとして設立されました。今年で 20 年を迎え、9 月 23 日に岡田武夫大司教様司式のもと記念国際ミサを捧げることができました。悪天候にも関わらず、400 名を超える方々にご参加いただきました。ご参加頂きました方々に感謝申し上げます。

■ アンさんありがとうございました！ エルリンさん、ソルさんようこそ！

2005 年より、在日フィリピン人司牧のため信徒宣教者として派遣されていましたが、アン・ユージニさんが任期満了でフィリピンに帰国されます。

後任に、エルリンさん、ソルさんが来日されました。今後の 2 人の活躍のためにお祈りください。



左から、エルリンさん、アンさん、ソルさん

■ クリスマス献金のお願い！

さまざまな事の多かった 2010 年も押し迫り、皆様には、救い主の誕生の喜びと、来るべき新しい年への希望のうちにお過ごしのことと思います。また、東京教区の優先課題の一つである「外国人の司牧と困難にある外国人のサポート」活動につきましては、この 1 年間、ご理解・ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

CTIC の活動については、賛助会会費と一般寄付金で多くの部分をまかなってきましたが、ここ数年、賛助会費・一般寄付金とも減少傾向が続いています。CTIC としても、皆様から寄せられたご好意を有効に使わせていただくよう努力を続けていきますが、この課題への取り組みのため、皆様のよりいっそうのご理解とご協力をお願いします。（所長 大原 猛）

宗教法人 カトリック東京大司教区 ARCHDIOCESE OF TOKYO

カトリック東京国際センター (CTIC)
Catholic Tokyo International Center

【運営委員長】岡田武夫 【所長】大原 猛

〒 141-0021 東京都品川区上大崎 4-6-22
カトリック目黒教会内

Tel (03)5759-1061 Fax 5759-1063
<http://www.ctic.jp> info@ctic.jp

* 賛助会へご協力下さい。

個人会員 《一口》3,000 円 (年間)

団体会員 《一口》5,000 円 (年間)

《郵便振替》00150-5-120640

カトリック東京国際センター賛助会

《銀行振込》みずほ銀行目黒支店

(普通) 8010313

宗教法人カトリック東京大司教区

カトリック東京国際センター

代表役員岡田武夫